

特集

宝物を探しに
海の楽園あいなん



撮影場所：瀬ノ浜観光案内待合所

「愛南町の海って何がすごいのか？」そう聞かれて、自信をもって答えられる人がどれくらいいるでしょうか。でも、すごいことはたしかです。愛媛大学が2010年に編集した『えひめ愛南お魚図鑑』には、愛南町の海域を中心に足摺宇和海沿岸で確認された魚が数多く収録されていますが、その種数は849ののぼり、これは、日本全体のじつに1/4程度の魚種が四国西南部の限られた1地域に分布している」ということになるそうです。さまざまな要因が考えられますが、愛南町の海やその周辺にたくさんさんの自然が残っている、豊かな海を育んでいるということも理由の一つではないでしょうか。

愛南町の海に魅せられ、ダイバーや研究者として海を見続けてきた3人の方に集まっていた、海の魅力や今後の展望などについて語っていただきました。

あやこ
松下 彩子
マリンショップ富平
インストラクター

1971年生まれ。
愛南町出身、在住。

実家はダイビングショップ兼醤油屋。松山の高校を卒業後、地元に戻り、父をサポートする形でスキューバダイビングのガイドを務め始める。それ以来20年以上にわたり愛南町の海に潜り続けており、2015年からは愛南マリンイベント実行委員会の委員として、スキューバダイビングのイベントなどにも参加している。



かくだ よしひこ
角田 善彦
西海観光船
総務チームマネージャー

1988年生まれ。
松山市出身。愛南町在住。

愛媛大学農学部で水産社会学を専攻し、四年時に南予水産研究センター(西海)に移る。大学時代はスキューバダイビング部に所属し、各地に赴いてダイビングを行う。現在は西海観光船事業に携わり、シーウォーカーを担当するなど新たなマリンレジャーの導入を図っている。愛南さんごを守る協議会の事務局を務め、サンゴの保全活動にも取り組んでいる。



なかち
中地 シュウ
公益財団法人黒潮生物研究所
所長

1975年生まれ。
千葉県市川市出身。高知県大月町在住。

大学時代は海洋学部に所属し、四年時から沖縄県の西表島にある臨海研究所で研究を行う。大学院修士課程修了後、黒潮生物研究所の研究員となり、足摺宇和海沿岸に生息する海洋生物の研究を続けている。2015年度には愛南町の海域約40か所を潜水調査し、サンゴ群集やサンゴ食巻貝の分布状況の把握などを行った。2013年7月より現職。





愛南町の海域には多種多様な生き物が生息している

— 海に潜り始めたのは —

松 中学2年生の頃、父に誘われて室手で潜ったのが初めてです。実家がダイビングショップをしていますが、当時は海に潜る気は全然なくて、まさか将来、自分がこういう仕事をするとは思いませんでした。

角 僕は中学3年生の頃です。講習は2年生から受けていましたが、早めに終わっていて、ダイビングショップにあった屋内プールでずっと遊んでいました。中学3年生の6月くらいに愛南町で海洋実習があり、その時に初めて海に潜りました。でも結局、高校生の頃はほかのことが忙しくて、ほとんど潜っていませんでした。

中 素潜りは昔からやっていましたが、タンクを背負って潜るようになったのは、今の仕事に就いてからです。2001年に研究所が大月町にできて、それから四国の海を知りました。

— なぜ愛南町へ —

角 高校卒業後、愛媛大学に進学して、スキューバダイビング部に入学しました。僕らが第34期ですから、意外と歴史があります。

大学で水産社会学研究室に所属していました。南水研の副センター長の先生の研究室でしたが、それまで愛南町に常駐した学生がいなかったんです。それで、ぎょしょく教育の研究をしますということ、南水研にいくことになりました。体裁よく愛南町に移って、潜り放題潜れるぞという気持ちもありました。

松 松山の高校を卒業する時、父から地元に戻って来いと言われてました。ダイビングショップは父の趣味から始めて、私が高校生の頃には盛んにやっています。私は父を補助する形でガイドとして海に潜るようになりました。

したが、その頃は船酔いもしましたが、海が良いなんて思ったことはありませんでした。

中 昔から生き物が好きで、自然豊かな地域で暮らしたいと思っていました。そこで静岡県に

キャンパスのある大学に進学しました。大学四年生の時、沖縄の西表島にある臨海研究所でサング礁性魚類の生態研究を行うことになり、それから約3年間、島で過ごしました。当時は素潜りで調査していたので、一度もタンクを背負って潜ったことはありませんでした。今考えるととてももったいないですよ。大学院を出る頃、四国に海洋生物の研究所をつくるという話があり、面接を受けて行けることになりました。

— 愛南町の海の特徴 —

中 四国の玄関ですよ。黒潮が四国で一番当たるところなので、いろいろな南の生き物が入ってきます。造礁サンゴ類を始めとした南方系の海洋生物の宝庫で、生き物の多様性はとても高いです。豊後水道を少し北に入ると海的环境が全然違うのも面白いですね。自然海岸が多

く、地形も複雑なので、いろいろな環境の「海辺」があります。環境が多様だから、いろんな種類の生き物が暮らしていけるわけです。

— 好きなポイント —

松 小横島※（※は地図参照）です。ソフトコーラルがとてもきれいです。それと三ツ畑田※の近くにヤロノ瀬というポイントがあつて、そこは地形が面白いです。ドロップオフになつていて、魚も多いしすごく面白いです。
中 横島や小横島の周辺は八放サンゴ類の群生がものすごいです。いろんな種類がありますし、あのあたりは海底が全部生きているという感じですよ。
松 生きている！本当にそうですね。





横島周辺のソフトコーラル (写真提供: 中地シュウ氏)

中海底の岩の表面すべてをイシサンゴの仲間や八放サンゴ類が覆っています。トゲトサカの仲間やウミウチワなど大木のようなソフトコーラルがあり、異世界の森みたいな感じですよ。八放サンゴ類の生息地としては国内有数で、専門家も驚くような場所です。

【角】僕は2号地※です。水深の深い平坦なところは生きている海底という感じですよ、浅いところはテーブルサンゴが広がっています。いろんな面白い生き物があるし、ソフトコーラルもびっしりあります。

【中】三ツ畑田のあたりもテーブルサンゴがいっぱいあって、増えているところがあります。

【松】三ツ畑田もきれいですよ。サンゴがミルフィーユみたいになり重なっているんです。

【中黒磐】※周辺もサンゴが増えており、今きれいですよ。以前、台風でかなりやられたことがありましたが、今はサンゴがすくすくと育っています。テーブルサンゴも色のあるソフトコーラルも一緒にあって、魚も多いです。それから須ノ川や由良半島の南岸にはところどころに100〜200歳クラスの巨大なサンゴがある場所があります。このような歴史のあるサンゴ群集も大事だと思います。

— 愛南町の

ダイビングの現状 —

【角】愛南町に潜りに来ている人って、若い人が少ないですよ。20代から30代くらいの人に

どうやって来てもらうかだと思います。

ある特定の生き物を見に行くという潜り方が僕はあまり好きではないんです。それをしようとする、形ができあがっているところと真つ向勝負をしなればいけません。ショップの数が多くて、情報共有ができて、なおかつポイントが密集していればできますが、愛南町では難しいですよ。何よりポイントとポイントがすごく離れています。

— 今後の展望 —

【角】例えば、サンゴの保全活動をやりたいダイバーはたくさんいると思いますが、参加する方法や窓口が分からないので、一般的に参加できるものではありません。そこで、愛南町ではこういう条件を満たせば参加できますよというような打ち出し方を、ただ遊ぶのではなく、遊びながら保全活動をして再生のお手伝いができるというような仕掛けができると面白いのではないのでしょうか。

【中】愛南町の海でしか見ることのできない風景があります。調査



ダイビングイベントでガイドを務める松下さん (写真左奥)

研究をしつかりやって、情報を蓄積したり、共有したりすること、この海がもつと有名になり、その価値が上がっていけば良いなと思っています。一般のダイバーの方にも、いろんな海の生き物のことや研究の面白さを知ってもらえると嬉しいです。

【角】まだまだ可能性はあると思います。まずはここにこれだけの海があるということ、ただだけ広い範囲の人たちに知ってもらえるかだと思います。一回ドーンとブームになって、それからお客さんが減って、今は忘れ去られた海という感じですよ。

— 愛南町の海の魅力 —

「角」何でもあるところですよ。どの楽しみ方でも楽しめてしまうところですよ。その日の気分によって、今日はこれを撮りたいなとか、今日は何となくカメラを持って記録だけしておこうとか、今日はサンゴのスポットチェックをしておかなきゃとか。どの遊びをしようと思っ

もできるし、まだかつちりと整理されていないがゆえに、こんな生き物がいないかなと探す楽しみも残っています。

「松」何年潜っても新しい発見があります。ずっと潜っていて、それでも、あーっと思うことが、やっぱり私って海が好きなんだなって最近思うんですよ。癒しですよ、潜っているだけで。

はじめは全然関心がなかったのに。海に入りたい、って思うんです。楽しいですね。

「中」発掘しがいのある海ですよ。まだまだ分からないことも多いですよ。大月や宿毛の海よりも環境のバリエーションは大きいと思います。大小様々な島があつて、潮の流れがとても速いところもあれば、御荘湾のよ

うに広大な干潟を持つ穏やかな内湾もあります。まだまだどんなものが出てくるのかと期待させるものがあります。サンゴだけじゃなくて、知られざる生き物がいっぱいいるはず。まだまだ楽しめそうな海ですよ。

「松」楽園ですよ。宝探しですよ。

教員として中浦小学校と福浦小学校（旧西海町時代）に赴任した経験があり、毎月本誌の「本日！海日和!!」コーナーに記事を掲載していただいている西尾さんに、愛南町の海の魅力について寄稿していただきました。

愛南の海に想いを寄せて

愛南サンゴを守る会（伊予市立佐礼谷小学校 教頭） 西尾 知照 ともてる



「愛南の海の魅力は何ですか？」とよく聞かれる。「サンゴかな？」「熱帯魚かな？」たくさんあつて迷ってしまう。私事で恐縮だが、旧西海町のグラスポーツに乗り、初めて海中をのぞいてから50年がたつ。よい機会をいただいたので、私にとつての愛南の海の魅力を今一度考えてみたい。

私が初めて愛南の海に潜ったのは、大学1年の時である。記憶が戻りにくい今日この頃だが、その時の感動は、今でもはつきりと覚えている。場所は

三ツ畑田島、季節は5月、良く晴れ上がった日であった。降り注ぐ太陽の光にキラキラと輝く海。飛び込んだ瞬間に目の前に広がった真つ赤なウミトサカや色とりどりの魚たち。存在さえ忘れるほど透明な海の水、ゆらめく光のカーテン。水中にいるのも忘れて、思わず「わー」と感嘆の声を上げていた。この瞬間から私の愛南フリークが始まった。仕事の都合で（周囲からは、自分の都合じゃないのと言われているが…）2回、計7年間、住民としてもお世話に

なつた。そのときから、「愛南の魚は、食べてもうまい！」との思いも強くなつた。単身赴任をして早々、某中浦郵便局の某釣井局長さんから、大きなカツオとともに大きなまな板をいただいた。これをきっかけに、毎日、魚料理を楽しんだ。話がそれてきたので元に戻すが、私が海に潜る大きな目的は写真撮影である。以前は美しい魚や変わった生き物を見ているだけで満足だったが、海中での感動を記録に残すとともに、海の魅力を伝えたいとの思いが強くなり

現在に至っている。こうして考えてみると、私にとつての愛南の海の魅力は、サンゴを中心とした多くの生き物たちである。そして、これらの魚介類は、見てもよし、食べてもよしである。ちょっと固い言葉になるが、一言でいうと「生物の多様性」である。この魅力をさらに伝えるためにも、三度目の仕事の都合がやつてこないかと期待している今日この頃である。